

A/A' distinction 再考

三好 暢博

1. 導入

言語計算の効率性という理論的課題に対し、人間言語の演算領域は制限されているという立場を採用してきた。ボックス理論 (Chomsky(2023)) の主要仮説(1)において、内的併合 (Internal Merge) の適用により、演算領域が閉じられるという提案がなされている

- (1) IM creates an element that has no further interactions with the EM-generated structures that constitute the propositional domain or with operations that apply there.” (Chomsky (2023: 8))

この仮説は escape hatch を認めず、局所領域内で演算を処理していくという制限の強いモデルある。

さらに、ボックス理論の仮説(2)の下では、直近の phase edge に併合された要素は更なる内的併合の対象とはならないため、フェイズを越える移動は存在しないことを意味する。すると、(3a)の構造は(3b)となる。目的語の who は直近のフェイズ edge であるボックスに入り派生から切り離される。解釈で必要とされる際にボックス内にアクセスできるので、(3b)で wh-句のスコープが決定される。最終的に、外在化の適用を受け(3a)が得られる。

- (2) For ease of exposition, we can think of the element E that is IM-ed to the phase edge as being put in a box, separated from the ongoing derivation D. E must however be accessible to D at later phase levels for interpretation at the interfaces. (Chomsky (2023:8))

- (3) a. Who did you meet?

- b. {C_Q {you {T {you {who {meet, who}}}}} } (who は box を表す。)

このことは、伝統的な意味での A'束縛による認可関係が存在しないことを意味するため、A/A'位置への言及を必要とした現象は再考を要することとなる。本稿では、A/A'の区別を廃棄しても、中核的となる経験事実を捉えなおすことが可能であることを示すことから始める。従来、名詞句移動の局所性、A位置及びA'位置からの認可において、A/A'位置の区別が必要とされてきたが、名詞句移動の局所性は、フェイズ不可侵性条件 Chomsky(2000, 2001)に還元されるため、まず、A位置及びA'位置から認可関係の検討を行う。その上でA/A'の区別を必要としないボックス理論の新たな予測を検証する。

2. A位置からの認可

束縛原理の関連現象と束縛代名詞の分布は、伝統的にA束縛による認可が必要とされてきた現象である。ボックス理論がこれらの現象に対し従来と異なる予測をするのは、いわゆるA'移動が関与する例(4-5a)である。それらに対応する構造である(4-5b)が示していることは、束縛子と束縛子間にc統御関係が成立しているか否かにより、束縛原理の関連現象が捉えられることである。また、A束縛が束縛関係の認可に寄与しないのは、c統御関係が成立していないためである。

- (4) a. Himself_i, John criticized t_i.

- b. [John [T [John [himself] criticized himself]]] [Condition A]

- (5) a. *John_i, He_i thinks that Mary criticized t_i.

- b. [He [T [He [thinks [that Mary [Mary [John] criticized John]]]]]] [Condition C]

束縛代名詞の分布(6)においても、堤(2024)が主張するように、束縛代名詞の解釈が可能なのは、束縛子が束縛代名詞をc統御している場合である。

- (6) a. Who_i seems to his_i mother to be naughty? a'. [C_Q [who_i seems to his_i mother [to be [who naughty]]]]

- b.* Who_i do you think his_i mother scolded? b'. [C_Q [you think his_i mother [who] [scolded who?]]]]

このように、A束縛は単純にc統御関係に置き換えられる

3. 寄生的空所

A束縛による認可を仮定してきた寄生的空所がどのように扱われるべきかを検討する。ボックス理論においてはフェイズを越える移動が存在しないため、寄生的空所がA束縛により認可されることはないこととなる。Kitahara (2024)は、真の演算子が寄生的空所をc統御することはないと論じている。(7a)で関連する構造を示したのが(7b)である。真の演算子と寄生的空所が直近のフェイズ edge に入った段階を示している。Kitahara は、C_Q が which

articles1 と *which articles2* にアクセスし、それらを指定部位置に外在化するが、この際 CP の指定部位置に外在化された *which articles* は、*which articles1* および *which articles2* と identical であるため(7a)が得られると主張している。

- (7) a. Which articles did John file t without reading pg?
 b. [C_Q John[which articles1] [file which articles1] [without [which articles2] [reading which articles2?]]]]]
 c. [which articles C_Q John[which articles1] [file which articles1] [without [which articles2] [reading which articles2?]]]]]

このように、A/A'-distinction を廃棄しても、中核的となる経験事実を捉えなおすことが可能である。したがって、この枠組みがどのような新しい知見をもたらすかが重要となる。

4. ブリ(Bùlì)語における残留 wh 句による寄生的空所の認可

伝統的に寄生的空所は、顕在的統語でのA'束縛による認可が必要であるとされてきた。しかし、技術的な細部をわきに置くと、前節で概観した分析では真の演算子と寄生的空所がともにボックスの位置を占めていれば、残留wh句が寄生的空所を認可できるという新たな予測が成立する。そして、ガーナ北西部で使用されるブリ語の寄生的空所は、この予測を支持する現象である。

wh移動が随意的であるブリ語では、(8b)に示すように、残留wh句により寄生的空所が認可される。ブリ語の残留wh句は、島の効果が観察されるばかりでなく、(9a)が示すように連鎖束縛の効果も観察される。英語の顕在的wh移動も同様の振る舞いを示すことを鑑みると、(8b)の残留wh句は直近のフェイズのedge、すなわち、ボックスの位置を占めていると考えられる。

このような現象は、標準的な単一サイクルを仮定したモデルでは説明が困難な現象である。この議論が正しい限りにおいて、ボックス理論を仮定してA/A'の区別を廃棄するという方向性は、経験的観点からも魅力的であるといえよう。

- (8) a. Ka gbaŋ kana; ati AJohn fa:li ____; [ali an karimi ____; ya] (Wh-movement)
 Ka book which ATI AJohn filed without reading neg
 'Which book did John file without reading?'
 b. AJohn fa:li ka gbaŋ kana; [ali an karimi ____; ya] (Wh-in-situ)
 AJohn filed Ka book which [without reading ____; neg]
 'Which book did John file without reading?' (Branan and Sulemana (2019))
- (9) a. [ka wa-dek foto kuna:] ati Ajohn we:ni [ayin ba nya ____]
 KA himself picture which ATI J. said that they saw
 'Which picture of himself did John say they saw?'
 b. AJohn we:ni [ayin ba nya [ka wa-dek foto kuna:]] (wh-in-situ)
 J. said that they saw KA himself picture which
 'Which picture of himself did John say they saw?' (Branan and Sulemana (2019))

主要参考文献

- Branan, Kenyon and Abdul-Razak Sulemana (2019) "In Bùlì, covert movement licenses parasitic gaps," *Proceedings of the 36th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 81-90.
 Chomsky, Noam (2000) "Minimalist inquiries: The framework," in R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka, eds, *Step By Step: Essays in syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155, MIT Press, Cambridge, Mass.
 Chomsky, Noam (2001) "Derivation by phase", in M. Kenstowicz, ed., *Ken Hale: a Life in Language*, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
 Chomsky (2023) "Miracle creed and SMT."
<https://www.icl.keio.ac.jp/news/2023/Miracle%20Creed-SMT%20FINAL%20%2831%29%201-23.pdf>
 Kitahara, Hisatsugu (2024) A review and reanalysis of some recent developments from GK to MC, and beyond, *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies*55, 199-214.
 堤博一(2024)ボックス理論におけるラベルの役割. 日本英文学会第 96 回大会(2024 年度)大会 Proceedings.